第152回東京オペラシティ定期シリーズ
2月22日(水)19:00開演　東京オペラシティ コンサートホール

第980回サントリー定期シリーズ
2月24日(金)19:00開演　サントリーホール

第981回オーチャード定期演奏会
2月26日(日)15:00開演　Bunkamura オーチャードホール

指揮：ミハイル・プレトニョフ

ピアノ：イム・ユンチャン*

コンサートマスター：依田真宣

ベートーヴェン：
ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 Op. 73『皇帝』* (約40分)

I.　アレグロ
II.　アダージョ・ウン・ポーコ・モッソ
III.　ロンド：アレグロ―ピウ・アレグロ

― 休 憩（約15分）―

チャイコフスキー：
マンフレッド交響曲 Op. 58 (約55分)

I.　レント・ルグーブレ―モデラート・コン・モート
II.　ヴィヴァーチェ・コン・スピーリト
III. アンダンテ・コン・モート
IV. アレグロ・コン・フオーコ

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）|
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：Bunkamura（2/26）

※演奏中や曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
※演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なるお席への着席をお願いすることがございます。
※演奏中のご入場は、かたくお断りいたします。楽章間のご入場については、楽曲の進行により係がご案内いたします。ご入場いただけない場合もございますので、ご了承ください。
※演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
※演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

出演者プロフィール

©上野隆文

指揮

ミハイル・プレトニョフ

Mikhail Pletnev, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 特別客演指揮者

一言では説明できない多才な芸術家。ピアニスト、指揮者、作曲家として魔法のような才能で、世界中の聴衆を魅了している。1957年ロシアのアルハンゲリスク生まれ。1978年、21歳でチャイコフスキー国際コンクールのゴールド・メダルおよび第1位を受賞し、国際的な脚光を浴びる。驚くべき技巧、深い知性に裏づけられた演奏、完璧にコントロールされた美しい音色で、カリスマ的人気を誇る現代最高のピアニストの一人として活躍。

ドレスデン国立歌劇場管弦楽団、ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団ほか数々のオーケストラを指揮。ボリショイ・オペラでの『スペードの女王』指揮で大成功を収めているほか、コンサート形式のオペラ指揮も行っている。

1990年ロシア内外の個人、団体より資金を得、ロシア史上初めて国家から独立したオーケストラとしてロシア・ナショナル管弦楽団（RNO）を設立。指揮者として東京フィルハーモニー交響楽団には2003年7月に初めて客演、以来定期的に招かれ、2015年4月より特別客演指揮者に就任。2022年には新たなオーケストラ、ラフマニノフ国際管弦楽団（RIO）を創設。

©Lisa-Marie Mazzucco

ピアノ

イム・ユンチャン

Yunchan Lim, piano

「イムはこの曲の魂に到達した」――ラ・セーナ

「イムは百万人に一人の才能である」――ダラス・モーニング・ニュース

2022年第16回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールにおいて、史上最年少（18歳）でゴールド・メダルを受賞、併せて聴衆賞、最優秀新曲演奏賞を受賞。

韓国の始興市生まれ。現在、韓国芸術総合学校に在籍。7歳でピアノを始め、翌年にソウル・アーツ・センターの音楽アカデミーに入学。13歳で韓国芸術英才教育院のオーディションに合格し、教師・指導者のソン・ミンスに出会う。翌年2018年、若いピアニストのためのクリーブランド国際ピアノコンクールで2位及びショパン特別賞を受賞。同年のクーパー国際コンクールでは最年少の参加者として注目を集め、3位と聴衆賞を獲得。クリーブランド管弦楽団との共演の機会を提供される。2019年には最年少の15歳で韓国のユン・イサン国際コンクールで優勝及び二つの特別賞を受賞。

2022-2023年のクライバーン優勝者ツアーでは4大陸への訪問を予定。2022年12月にはサントリーホールにて日本デビューを果たした。

楽曲紹介

ベートーヴェン
ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 Op. 73『皇帝』

解説＝沼口 隆

2/22
2/24
2/26

1808年12月22日、ベートーヴェン（1770-1827）はアン・デア・ウィーン劇場で大規模な演奏会を開催した。新聞で「すべて新作、未公開」と告知された曲目の中には、交響曲第5・6番をはじめ、ピアノ協奏曲第4番、ハ長調ミサ曲からの抜粋（ドイツ語歌唱）、『合唱幻想曲』などが含まれていた。演奏面では成功とは言い難かったようだが、錚々たる曲目は、いわゆる「傑作の森」の集大成と呼ぶに相応しい。ピアノ協奏曲第5番の作曲に着手したのは、この演奏会の直後のことだったと推定されている。

注目すべきは、ベートーヴェンがこの演奏会でピアノ協奏曲と合唱幻想曲のソリストを務め、ピアノ独奏用の幻想曲も披露したことである。合唱幻想曲のピアノ独奏も独奏用幻想曲も基本的に即興だったと考えられる。この創作性の極めて高い演奏体験が、新たなピアノ協奏曲への創意に火をつけたとの推論は充分に成り立つだろう。

ピアノ協奏曲第5番は、それまでの協奏曲で定石であった即興演奏を含んでおらず、カデンツァもすべて記譜されている。しかし、興味深いことに、即興を含まないにも拘わらず、全体は即興性に満ちている。曲頭からピアノ独奏が活躍するという意味では、完全なる独奏で主題を提示する第4番の方が斬新だという見方も成り立つ。第5番の冒頭はオーケストラの総奏であるし、**第1楽章**に関して言えば、そもそもピアノが主要主題を明瞭に提示することはない。第5番における新奇性は、冒頭からほとばしり出てくるような即興性であり、それが引き起こす躍動感である。

第2楽章においても、ピアノは当初、オーケストラが提示した素材には目もくれず、ひとり静かに語り始める。独特の説得力を持ってはいるが、音階下行に若干の手を加えた程度の節回しであり、主題として彫琢されたものではない。変奏された主要主題が奏されるのは、だいぶ後になってからで、これもまた幻想曲風のパッセージへと移行してゆく。

ロ長調という主調に対して突飛な調の第2楽章は、末尾におけるロ音から変ロ

音への印象的な「ずり下がり」で軌道修正し、直結する**第3楽章**への移行を準備する。何かを模索するような分散和音上行は、実際に主題に繋がってゆくのだが、即興プロセスを写し取ったかのようである。ロンドと題されてはいるが、ハ長調やホ長調など、かなりの遠隔調にも自在にわたり歩き、こうしたある種の不確実性もまた即興を感じさせる要素となっている。

[作曲年代] 1809年　**[初演]** 1811年1月13日、ウィーンのロブコヴィッツ侯爵邸にてルドルフ大公の独奏による　**[楽器編成]** フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

ぬまぐち・たかし（音楽学）／東京藝術大学准教授。主要な研究領域はベートーヴェンをはじめとする18～19世紀のドイツ語圏の音楽。共著に『楽譜を読む本～感動を生み出す記号たち～』（ヤマハミュージックメディア）ほか。共訳に『ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第32番 op.111 批判校訂版: 分析・演奏・文献』（音楽之友社）ほか。

チャイコフスキー
マンフレッド交響曲 Op. 58

解説＝山本明尚

バイロンの劇詩『マンフレッド』の筋書きを元にした交響曲を書いてみないか――先輩作曲家バラキレフから、チャイコフスキー（1840-1893）は1882年と1884年の二度にわたって提案を受けた。この構想は、1868年に標題音楽の傑作『幻想交響曲』で知られるベルリオーズに持ちかけて以来、バラキレフがずっと温めていたものだったが、改めてチャイコフスキーこそがきっと「素晴らしく」この構想を仕上げてくれるだろうという確信があった。しばらくの間、多忙なチャイコフスキーは様々に理由をつけて仕事を断っていたが、1885年春、仕事の波が途切れたのを機にバラキレフの進言を受けようと『マンフレッド』に取り掛かる。当初は渋々だったチャイコフスキーも、徐々に作業を通じて作品に魅力を感じ、1885年9月22日（露暦）に全曲を完成させた。1886年の初演は聴衆・批評家両方から温かく迎えられ、舌鋒鋭いことで知られるツェーザリ・キュイも「テクスチャと管弦楽法は見事で、我が国の交響楽の宝庫への新しい貢献に感謝するのみ」と絶賛の言葉を惜しまなかった。

本作の特徴は何と言っても、各楽章に明確な内容が定められていることである。初版の楽譜に掲載された筋書きは、バラキレフの言葉を借りれば理想を維

持できない「現代の人類の病理」を象徴するもので、チャイコフスキーが『スペードの女王』、『フランチェスカ・ダ・リミニ』、第4番以降の交響曲など、自作で何度か陰に陽に取り組んできた「運命／宿命という問題」が、筋書きにも音楽にも描き出されていると言えるだろう。

第1楽章は、「宿命的な存在の問題、絶望的苦悩と罪を犯した過去の記憶に苛まれ」、絶望するままにアルプスを彷徨う主人公マンフレッドを表現する。2つの主題を持つロンド形式により、序奏と第一主題でマンフレッドの姿を、穏やかな第二主題では彼が死に追いやってしまったかつての想い人アスターティの追憶を描く。マンフレッドの主題は各楽章で再現され、全曲の中で主人公としての立ち位置を持つ。

第2楽章では、軽やかなパッセージによる幻想的な曲調によって、滝の虹のしぶきの中に現れるアルプスの妖精が表現される。中間部ではロシアの民謡的な素材が展開される。

「素朴、貧乏、自由気ままな山人の生活の図」であるという**第3楽章**は、8分の6拍子、ト長調という調性、ホルンのソロ、素朴なリズム、バグパイプの模倣や舞台裏で響く鐘の音などによって、伝統的な「牧歌」の様式をなぞっている。その一方で、中途の劇的な展開や第1楽章第二主題の回想からは、チャイコフスキーが標題で説明したもの以上の内容の豊かさを感じざるを得ない。

第4楽章は2つの部分からなる。前半は地獄の酒宴を描いており、乱痴気騒ぎとロシアの舞踊をそれぞれ想起させる2つの主題が対置されている。後半ではこれまでの性格的主題が次々と現れる。呼びかけに応えてアスターティの亡霊が現れ、主人公の苦悩が回想されながらも、彼は赦され、荘重で穏やかな死による救済が訪れる。

[作曲年代] 1885年　**[初演]** 1886年3月23日（露暦11日）、モスクワ、マックス・エルトマンスデルファーの指揮による　**[楽器編成]** フルート3（3番はピッコロ持ち替え）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン2、バストロンボーン、テューバ、ティンパニ、打楽器（タンブリン、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、鐘）、ハープ2、弦楽5部、オルガン

やまもと・あきひさ／音楽学者。専門は19世紀後半～20世紀初頭のロシア芸術音楽。現在、東京藝術大学大学院博士課程およびロシア国立芸術学研究所に在籍。モスクワを拠点として研究活動を行う。2020、21年度公益財団法人ローム ミュージック ファンデーション奨学生。日本音楽学会、日本ロシア文学会、ロシア・フォークロアの会各会員。